

# 注目技術 農業特許許可

農業経営に変革を起こす!?

第22回

**浅野 隼** 知的財産アナリスト（特許／コンテンツ）  
一級知的財産管理技能士（ブランド／特許／コンテンツ）  
事務官は知財戦略、ブランド戦略、事業干渉業務。アクリ創研株式会社代表取締役、浅野国際計画事務  
所長として、全国段階、地域部のIAの顧問、農林水産省国立研究開発法人審議會専門委員会兼任として、東京都立大学人文学部准教授、6次産業化プラ  
ットフォーム（中央・地域経営干渉）や滋賀県田舎町田舎家町田舎業界（農業・農業生産性）を務める。半蔵の財産法、  
監修・アグリ創研株式会社 代表取締役 浅野 隼

反射ネットが税込二〇円／二五五円／<sup>b</sup>、また、虫フラッシュネット（目合〇・六三リ）が税込一八三円／<sup>b</sup>、他社防虫ネット（目合〇・六三リ）が税込二四〇円／三〇〇円／<sup>b</sup>でした。引張強さ（耐久性）も、虫フラッシュシートが耐候一〇〇〇時間（サンシャイン照射）で八四%以上、虫フラッシュネットが耐候八五〇時間（キセノン照射）で八一%を保持しています。

(2) 鮫島ねむひと A 講演の声  
〈東京のネットワーク〉

（コメ） ハーネス最高峰もあれば、が、ネットの発展は気が付かれてはいなかった。ハサウエイが周りに壁一メートルのハーネスを張って川面に沿うようにして、これがアキラハラの壁で、壁の間に人が飛び込むやうな空気感覚だったからだ。確かに川の飛び込みはやめさせられたが、それよりもはるかに感動したのが、十数年前で流れやうだぬく、粗鄙なわらじの上にトハーネス掛けるやうに歴史性がアリバタアリするところがむしろ印象的。（「アキラハラの壁」）

近畿輸唱せ取りませんで  
したが、期待されの製品か  
と感ひます。吉田は瀬、反射率、  
吸量率、ハートの製造のデータ  
は製造会社のHPにあります  
が、ネジナットのハートの設置・  
未設置・想定唱との、湿度や防  
虫・通気性・透水性の比較など  
現地確認をやむなし難しき一  
タからして農家へ推奨しかねる  
ため「期待」をもつた。

コメント> お詫び申しますが、初めて購入しておられた商品が、ネジ等で、大きめの目印を設けておられた結果、取扱いを誤った形で、お手数をおかけしてしまっており、大変申し訳ございません。お手数をおかけしてしまって、大変申し訳ございません。

(3) 開発企業の声

この度は大変光栄な賞を  
頂きました、誠にありがとうございます。  
弊社では一周年  
(総合的病害虫管理)に向けた  
新しく資材の開発に取り組んで  
おります。その中でも今回取り  
上げていただいた拡散反射率を  
高める技術が、皆様お手に取て確

## 第22回（最終回） 農業特許表彰

## 1 表彰にあたって

- (1) 表彰の趣旨  
本通報は一〇一〇年四月に開始しました。当時、農業資材・農業機械等の特許出願が増加し、また、異業種メカニカルが新規参入する一方で、社会的変革を起こすような面白い発明・製品が理もれ、これらの社会実装や販路開拓が進んでいないという実態がありました。

そこで、本通報では、①農家の皆様が製品を選択・導入する際の視点の提供、②JA職員の皆様が農家を支援・助言する際の技術動向情報の提供、③開発企業が製品の価値を農家に伝えるためにフォーマットの提供を目的として延べ一九件の発明・製品を取り扱いました。大きな販路を持たないために農家の目に留まりづらい、研究機関や新規参入企業の発明・製品をできるだけ取り上げたのも特徴です

本表彰を通じて、改めて知財アーティストがどんな視点で発明・製品を「目利き（発掘および価値付け）」したかを振り返り、皆様の今後の殷業経営にお役立ていただけましたら幸いです。

(2) 選考基準および審査員

本連載で取り上げた一九件の発明・製品を対象に、知財アナリストの視点から選考しました。具体的には、各審査員が次の四項目について各五点（計二〇点満点）で採点し、全審査員の合計点の最も高い発明・製品を大賞に選出しました。

- ①技術的優位性（課題の切口が斬新、解決手段が目を引く等）
  - ②展開しやすさ（新たな使用方法・転用・組合せ・事業展開の可能性等）
  - ③導入しやすさ（費用、技術習得、導入実績等）
  - ④審査員独自の視点からの加点  
審査員は、本連載を執筆した知財アーティストの、浅野卓、石丸華子、大久保国明、栗岩信夫、後藤謙治、田中良恵、中谷浩一、廣瀬浩、三沢岳志です。

2 農業特許大賞の発表

(1) 大賞および表彰理由  
　　小泉製麻株式会社「虫  
　　フロシルバー・虫ア  
　　ラシルネシ」(特許第 6319853  
号) (本誌 p.11 号: 大久保)

最多一二五点を得た当該製品  
は、紫外線を背に飛ぶといふ虫  
の生態を逆手に取り、虫を飛行  
錦糸をせしめ下させる、散反射  
シートおよび防虫ネットです。

薬剤を使用しない飛行錐と  
いう切口や、拡散反射素材の製  
造方法に「技術的優位性」があ  
り（虫アソビネットのほうは  
改良され、現在は特許技術とは  
異なる技術で製造）、害虫忌避  
や収量増（紫外線の高反射）、遮熱（赤外線の高反射）、抑草（高  
遮光のシート）、通気性（広い  
目合のネット）にこだわらず、  
干し場や体験農場での利用、作  
業着への応用可能性などの「展  
開しやすさ」が評価されました。

導入しやすさについて、希望小売価格は、虫フラッピシートが税込三三〇円／m<sup>2</sup>、他社UV

該製品の位置づけ・特長を明確にする手法は、普段取材・編集している内容とまったく違うので興味深かつたです。特に農業用ドローンに関する一つの記事（本誌六〇三号・六〇七号：ともに三沢）は、ドローン業界の現状や農業への応用事例が説明されており、農業の未来を感じました。（本誌編集部・松倉由香）

(3) 鋼構造の押記記事  
本連載で取り上げたすべての発明・製品は私が選択しましたが、それをどんな切口で伝えていくかは各執筆者に委ねました。農業以外の異業種連携による新たな地域特産農産物の開発（本誌六〇八号：栗岩）や、有機廃棄物の地域リサイクルシステムの構築（本誌六一〇号：田中）、バイオマスの地産地消（本誌六一三号：後藤）、温暖適地農産物の寒冷地での生産（本誌六一五号：中谷）等、地域事業への可能性に言及している記事に注目です。「スマート農業」とともに今後に主流になるでしょう。（あさひ）